

平成29年

10月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

(果樹) 東予地方局産業振興課産地育成室

(畜産) 東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0898) 68-7322(代)

TEL (0897) 57-9122

【天気予報】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2014年	18.2	22.4	14.2	268.0
2015年	17.6	22.9	12.9	16.0
2016年	19.6	23.6	16.4	72.5
1981~2010年	18.2	22.2	14.7	115.5

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】

1 落水

落水時期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保って下さい。落水が早いと、登熟不良となって品質低下を招くとともに、稈が弱まり倒伏しやすくなります。

2 収穫

刈取り時期は、早過ぎると未熟米や青米が多くなり収量も少なくなります。また、遅過ぎると茶米や胴割粒が発生するとともに、食味や品質が低下するため、下表の収穫適期基準を参考に適期刈取りして下さい。

【品種別収穫適期基準】

区分	ヒノヒカリ	にこまる	松山三井
出穂後積算温度 (°C)	900~1,100	1,000~1,150	1,050~1,200
最長稈黄変率 (%)	85	85~90	85~90
出穂後日数 (日)	40~46	42~48	42~50

3 乾燥

収穫後は速やかに乾燥機に張り込み、乾燥を始めて下さい。乾燥速度は1時間当たり0.8%以内とし、胴割れや乾燥むらを防ぐために急激な乾燥はしないで下さい。過乾燥は品質や食味が低下するので、仕上げ水分は14.5~15.0%が目標です。

4 調製

事前に籾摺り機の点検や部品(ゴムローラ等)交換や調製を行い、玄米の肌ずれや胴割れ米の発生を防止して下さい。

調製はライスグレーダーを使用し、整粒歩合80%以上を目標にして下さい。ふるい目は、1.85mm以上を使用して、未熟粒を除去し、上位等級に仕上げして下さい。

<山橋>

【野菜】

1 さといも

(1) 庭先選別

10月はさといもの本格的な収穫時期に入ります。

芽つぶれ芋や割れている芋等規格外品を混入しないように、庭先選別を徹底し、計画的に出荷して下さい。

(2) 残さ処理

圃場に出荷調整したときに出る芋等残さを放置しないで、速やかにロータリーで粉碎し、春までに分解させましょう。

2 やまのいも

茎葉が完全に黄化するまでは、土壌が過度に乾燥しないように水管理して下さい。茎葉が黄化した後は、排水対策に努めて下さい。

3 そらまめ

(1) 高品質安定生産のポイント

①土づくり ②高うね栽培(排水対策) ③適期播種(10月7日~15日頃) ④誘引の徹底 です。

(2) ポット育苗

種子は10a当たり80程度準備し、「おはぐろ部分」を斜め下にして、種子の尻部がわずかに見える程度に1粒ずつ土に差込みます。害虫防除のため不織布等で被覆して下さい。

(3) 施肥・定植

土づくりとしては、堆肥3,000kg/10a、苦土石灰100kg/10a、基肥として定植の1週間前によりん20kg/10a、菌根甘60kg/10aを施用し、マルチ張りは土壌に湿りのある状態でを行います。

定植苗は、本葉2枚半程度の若苗(播種後2週間程度)とし、深植えにならないよう注意して下さい。

栽植密度は、畝幅140~150cm×株間40~45cmです。

アブラムシ防除のため、植穴にアドマイヤー1粒剤を1株当たり2g施用します。

<越智>

【果樹】

1 温州みかん

(1) 腐敗防止対策

本年産は、夏季の高温乾燥の影響で果皮の体質が弱く、今後の降雨や気温によっては浮皮果が発生し、出荷後に腐敗果の発生が多くなる可能性があります。

ます。収穫前の腐敗防止剤(トップジンM水和剤2,000倍、収穫前日まで、5回以内)の散布を徹底して下さい。

収穫は、果実品質のバラツキを避けるために着色が早い樹冠外周、上部から分割採収し、果実を丁寧に扱って、腐敗果の発生・混入を防いで下さい。

(2) 樹勢回復

樹勢を回復させ、耐寒性の向上と翌春の花芽分化を促すために、収穫期前後の秋肥の施肥と収穫後の液肥葉面散布を行います。また、降雨がなく土壌が乾燥する場合は、灌水に努めて下さい。

2 中晩柑類

(1) 甘平、紅まどんな

甘平は、裂果の発生が落ち着く10月上旬中旬に、最終着果量12~13個/m²に調整します。品質向上のために灌水量を徐々に減らし、収穫までは土壌乾燥が続く場合は、少量灌水を行います。

紅まどんなは、果皮障害の発生を抑制するために、簡易屋根掛け栽培は10月上旬に天井ビニールを被覆、露地栽培は着色が進んだ頃(8分着色以降)に果実の袋掛け、または資材を用いて樹体被覆を行って下さい。収穫までは土壌乾燥を促し、適度な水分ストレスを与えることで糖度の蓄積を促します。

(2) その他の中晩柑

内なり、裾なりの見落としした果実、果梗枝が太く粗皮で品質が劣る大玉果、小玉果、キズ果等を落とし、正品率の向上を図ります。

収穫までは、土壌乾燥が続く場合は灌水を行います。

(3) その他

カメムシの発生に注意して下さい。また、かいよう病に罹病した夏秋梢や果実は除去し、必ず園外に持ち出して処理して下さい。

<本田>

【花き・花木】

1 球根養成栽培

アネモネ、ランタンキュラスともに、播種適温は10~15°Cで、10月中旬以降が適期となります。20°C以上では発芽不良となるので早播きは避けて下さい。

○アネモネ

(1) 播種

播種量は1kg/10aを目安とし、乾いた土で種をほぐし均一に播種します。堆肥等で種が隠れる程度に覆土し、ドラム缶で鎮圧します。

(2) 除草

播種後10~12日後に除草剤を散布します。

○ランタンキュラス

(1) 播種

播種量は7~10g/100m²、堆肥等で種子が隠れる程度に覆土し、ドラム缶で鎮圧します。

(2) 敷きワラと灌水

不織布やワラなどで被覆し、乾燥を防止し随時灌水します。2~3週間後、発芽し始めたら徐々に被覆資材を取り除きます。

2 シキミ

病虫害防除

害虫の発生が見られたら、トレボン乳剤2,000倍を散布します。輪紋葉枯れ病が見られる圃場では、トップジンM水和剤1,000倍を散布します。病害を予防するために、下枝を伐採し、樹間を広く取り、通気性を良くして過湿を避けま。

<日野>

【畜産】

猛暑も終わり、一転して朝方の最低気温が10月上旬に平年で17°Cを切るようになり、下旬には12.7°Cに冷え込んできます。昼夜の温度差は約8°Cで年間最も激しくなります。

1 飼料の増給

家畜は冬に備えて飼料をこれまで以上に採食しますので、それに合わせた飼料管理が必要となります。

飼料が不足し栄養状態が悪くなると、母豚や母牛は発情の発現が微弱になり、発情再帰も遅れる場合がありますので、飼料摂取量とともに発情を観察し早期発見に心掛けて下さい。

2 畜舎環境の整備

夏場の畜舎は換気・通風を重点において整備しましたが、これからの季節は鶏の雛や子豚、子牛が冷たい夜風の影響で風邪をひきやすくなります。

舎内に吹き込む風向き等を考慮しながら朝晩の防風施設の操作を行って下さい。

3 秋のハエ対策

秋のハエは、春のハエよりも薬剤が効きにくいものが多くなります。

それは夏季に同じ薬剤の連用の中で生き延びた幼虫がその薬剤耐性を獲得したためです。

薬剤の中でもIGR系(脱皮阻害剤:商品名ネポレックス、デミリン等)等は、ホルモン物質に関与し生理的に脱皮を抑える働きにより耐性ができにくいため、うまく組み合わせ使って下さい。

<二神>